

氏名	澤村 貫太
学位の種類	博士（応用情報科学）
学位記番号	博情第23号
学位授与年月日	平成25年3月22日
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当（課程博士）
論文題目	親子の愛着関係と青年期における気分・心身状態および脳機能との 関連性
論文審査委員	（主査）教授 水野(松本) 由子 （副査）教授 堀尾 裕幸 （副査）教授 石垣 恭子

### 学位論文の要旨

Bowlby の愛着理論は、子どもの主要な養育者（主に母親）との相互作用に関する提唱である。相互作用を通して愛着に対する個人の心理的状态「内的作業モデル」を形成するとされている。

そこで、青年期の健常者 87 人に対して親子の愛着関係と青年期における気分状態・心身状態を調べるために、①内的作業モデル尺度（Internal Working Model: IWM）、②気分プロフィール検査（Profile of Mood States: POMS）、③Cornel Medical Index: CMI を用いた。被検者を IWM によって「安定群」「回避群」「アンビバレント群」の 3 群に分類した。IWM と気分状態および心身状態の関連性を調べるために、POMS では、IWM の安定群、回避群、アンビバレント群の 3 群における POMS の各項目を比較した。また、CMI では IWM の 3 群と C、I、J 得点、精神的自覚症得点、身体的自覚症得点を比較した。両心理検査の統計解析には一元配置分散分析および多重比較には Bonferroni 法を用いた。その結果、安定群は葛藤が少なくストレスが低いことから心身ともに健康状態であった。回避群は心理的苦悩が強く身体症状への置き換えや逃避が起こることによって、不快感情を身体的自覚症として表れた。アンビバレント群は愛着への不安や全ての感情を抱え込んでしまい抑うつ状態に陥り、混乱状態を引き起こしてしまうことで精神的自覚症が表れた。このように、幼児期のアタッチメントによって青年期の性格に影響を及ぼすことが示された。また、親の養育姿勢が思いやりや溺愛といった受容的な場合に子どもの性格傾向は安定となり、親の養育姿勢が支配や期待といった非受容的な養育姿勢な場合に子どもの性格傾向は不安定となり親の養育姿勢の重要性が明らかになった。

一方、脳機能の観点からみると、性格安定の人は快刺激に対しての反応が早く、すぐにリラックスすることができた。性格安定の青年期の脳機能活動は安静覚醒時と楽しみセッションでは後頭部で反応がみられた。一方、性格不安定な人は快刺激に対する処理を失敗してしまう可能性があり、その結果、快適な状況を楽しむことがうまくできずにリラックス

スできていない可能性が考えられた。不安定な性格の被検者の側頭部での活動は不快刺激下で引き起こされる。不快や恐怖状況で扁桃体などの側頭部での活動が引き起こされ、扁桃体を含む側頭部は恐怖関連などの不快刺激の処理に重要であり、感情表現の方法に関連していると考えられる。また、不快状況に対する性格不安定な人の側頭部の感受性は、すでに幼少期に出現していた。幼児期の不快経験に曝されると機能的・形態学的障害が引き起こされ、青年期における適応障害、うつ病といった精神障害の原因になりうる。

これらのことから、幼少期に受けた非受容的な親子関係の場合、青年期の性格は不安定となり、感情表現をうまく表出することが困難なことから、回避群やアンビバレント群のように疲労などの身体症状やうつ病や適応障害といった精神症状が出現することが考えられた。本研究では、幼児期の親のアタッチメントによって社会適応や発達を妨げるだけでなく、青年期における精神的な健康面に対して大きく影響を与えることを示した。

## 論文審査の結果の要旨

Bowlby は、「乳幼児と母親、またはそれに代わる母性的養育者との相互的人間関係が親密かつ持続的で、しかも両者が満足と幸福感に満たされている状態が、精神的健康の基本である。」と述べ、発達初期に特定の他者との間に情愛的絆を形成することが、後に健全に人格を発達させるために重要であると述べている。

本研究では、青年期の健常者 87 人に対して、IWM、POMS、CMI の 3 つの心理検査を施行し、組み合わせて関連性を調べた。被検者を IWM によって「安定群」「回避群」「アンビバレント群」の 3 群に分類した。気分状態および心身状態の関連性を調べるために、IWM の 3 群における POMS の各項目を比較した。また、CMI では IWM の 3 群と C、I、J 得点、精神的自覚症得点、身体的自覚症得点を比較した。その結果、安定群は葛藤が少なくストレスが低いことから心身ともに健康状態であった。回避群は心理的苦悩が強く身体症状への置き換えや逃避形成によって、不快感情が身体的自覚症として表れた。アンビバレント群は愛着への不安や全ての感情を抱え込んでしまい抑うつ状態に陥り、混乱状態を引き起こすことで精神的自覚症が表れた。このように、幼児期のアタッチメントによって青年期の性格に影響を及ぼすことが示された。また、親の養育姿勢が思いやりや溺愛といった受容的な場合に子どもの性格傾向は安定となり、支配や期待といった非受容的な場合に子どもの性格傾向は不安定となり親の養育姿勢の重要性が明らかになった。

次に脳機能の観点から、性格安定の人は快刺激に対しての反応が早く、すぐにリラックスすることができた。性格安定の青年期の脳機能活動は安静覚醒時と楽しみセッションでは後頭部で反応がみられた。性格不安定な人は快刺激に対する処理を失敗してしまう可能性があり、その結果、快適な状況を楽しむことがうまくできずにリラックスできていない可能性が考えられた。不安定な性格の被検者の側頭部での活動は不快刺激下で引き起こされる。不快や恐怖状況で扁桃体などの側頭部での活動が引き起こされ、扁桃体を含む側頭部は恐怖関連などの不快刺激の処理に重要であり、感情表現の方法に関連していると考えられる。また、不快状況に対する性格不安定な人の側頭部の感受性は、すでに幼少期に出現していた。幼児期の不快経験に曝されると機能的・形態学的障害が引き起こされ、青年期における適応障害、うつ病といった精神障害の原因になりうる。

以上を総合した結果、本審査委員会では、本論文が「博士（応用情報科学）」の学位授与に値する論文であると全員一致により判定した。